広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	A. Camusにおける現実と芸術について
Author(s)	辻, 昭臣
Citation	フランス文学 , 9 : 32 - 37
Issue Date	1967-12-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040887
Right	
Relation	

A. Camus における現実と芸術について

辻　　昭　　臣

カミュは，その生涯を通じて果たした文学者と思想家という二つの大きな役割にもかかわらず，彼自身は哲学者というよりはむしろ芸術家として自らを認めていたということは注目すべきことである．彼は，自分が哲学者だけとして留まりえず，芸術家としての立場にあったということの正当な理由を1945年の *Carnets* で次のように宣言している．

「なぜ私は芸術家であって哲学者ではないのか？　それは私が言葉でものを考え，観念でものを考えないからだ．」(*Carnets* II p. 146)

ここでは，「言葉でものを考える」という所がきわめて大切なのであるが，それは次のことを意味している．すなわち，人間に密着した様々な事象が，この現実世界においていかなる条件のもとにいかなる帰結をもたらすかということを，自己の原体験に基づいて直接的に考えるということである．この観点に立ってこそ彼は，彼の作品に肉体的な生命を吹込むことができる．なぜなら，文学者にとって「言葉」とは，彼の生命に他ならないのであるから．

また，カミュは芸術家としての素質を証明する美に対する関心を，1950年の *Carnets* で次のように告白している．

「私は際限なく美に生きてきた．すなわち永遠のパンにだ．」(*Carnets* II p. 326)

明らかに，彼の生涯にわたって，美が彼の精神の糧であった．現実とそれを体現する美を素材とした芸術との蝶番となるのは，彼の詩人としての資質である．彼を取囲む自然的な現実，地中海の太陽と海のいぶきは，美を詩によって定着する能力を彼に授けた．異郷的風土こそ彼の詩的散文の絶好の題材であった．彼の肉体は，官能によって生命的な風俗を呼吸した．彼の詩的慧眼によって見透かされたアルジェリア特有の生きる喜びや悲しみはその透明な美の相貌を思わず露呈してしまう．しかし，一さいが美に形象化されたなら，人間性は消滅してしまうであろう．カミュの貧窮という宿命的な現実は，彼が人間の基本的な条件を尊重することに荷担した．

自然的な現実によってはぐくまれたカミュの芸術的才能の胚珠は，時代背景という媒体によって社会的自我として開花する．現代の芸術家の芸術に関する問題は，常に彼自身の存在の問題に帰する．この地上における存在が一さいであったカミュにとって，あらゆる問題を越えて現実世界の具体的なものの中で勝利を占めることが最も重要な問題であった．それと同時に，彼が生きている複雑で激動に満ちた時代が直面している切実な問題を無視せずに対処することが，永遠性を信じない彼の使命であった．この彼を取巻く，ゆるぎの

ない世界と，彼を拉する歴史的現実こそ，彼の存在の条件を決定づけるものであった．彼は，このような条件のもとに，この現実世界の完全な充実感と完全な合理性を執拗に追求する．そしてこれらを獲得するために彼の全情熱を傾けて顧りみない．しかし，この努力は果てしなく不毛である．カミュの創造とは，まさに不毛の情況で現実と想像との統一を目ざす創造に他ならない．

ところで，想像的世界よりも現実の優越性を信じる作者の創造が現実世界で意味を持ちうるためにはどのような創造であらねばならないだろうか？　この設問は次のような内容を持っている．すなわち，もし現実が完璧なものであったなら，芸術は無益な豪奢になってしまうだろうが，実際の現実は明らかに不備なものであるから，芸術は無益な豪奢ではない．しかし，すべての芸術が現実を充足させるために，無益な豪奢でないとは限らない．それでは，現在あるがままの状態の現実の中で芸術が，無益な豪奢に陥らないための条件とはいかなるものであろうか，という風に先ほどの設問は言い換えることができる．この疑問を解決するためには，カミュの創造と美に対する考え方の発展段階を，現実と芸術の観点から究明しなければならない．

カミュの芸術論の出発点は言うまでもなく，『シジフォスの神話』である．不条理の領域において現実と芸術はいかに統一するか．当時の彼にとって，不条理こそ芸術の衰弱を救済する＜芸術の塩＞ともなるべき唯一のものであった．不条理の人間にとって，生命確認の最も確実で充実した方法が芸術的創造でなければならない．「創造すること，それは二度生きることである．」（『シジフォスの神話』Pléiade 版 p. 173）

不条理の芸術家についてカミュの言葉に耳を傾けてみよう．

「不条理の芸術家にとっての問題は，作る能力を越える生きる能力を獲得することなのだ．そして結局，この不条理の風土のもとで，偉大な芸術家とは何よりも先ず，偉大な生きる人なのである．」(ibid. p. 176)

しかし「生きる」ことの中には，創造することも含まれる．現実において直接的に生きることと，創造するという生きることは，カミュの全生活の中でどのように調和し，あるいは離反しているのだろうか．芸術家の体験全体とそれを反映する作品との間の相関関係について彼は，1942年の *Carnets* で次のように解明している．

「創造と行為の間の距離を考えてみなければいけない．真の芸術家は，彼の行為と想像力の中間にいる．」(*Carnets* II p. 20)

芸術家がこのような場所に位置してこそ，彼の作品の形式に凝集されうる体験の豊かさは増大し，それと同時に彼の作品によって反省させられた彼の体験そのものの豊かさも増大しうるのである．この可能性を完成させるための必須の条件は，何よりも，行為と想像力を同時に洞察することのできる比類のない明晰さを持つことである．この明晰さだけが

人間の意識を目覚めた状態に保ちうる．文章のすみずみに至るまで意識を透徹させておけば，この世の不完全性を見抜いてそれを修正し，しかも世界の未知の部分に対しての明確な意味づけが可能なのである．

さて，不条理の作家は次のような不条理の作品を目標にする．カミュはその原理をきっぱりと述べている．

「不条理の作品は人生の目的や意味や慰めではありえない．創っても創らなくても，何一つ変りはないのだ．」(『シジフォスの神話』Pléiade 版 p. 176)

人間の生命の無用性に立脚する不条理の思想は，その創造の一側面において完全な無償性を要求する．この時，作品は現実に対して何のかかわりをも持たなくなるとともに，現実も作品に対して何のかかわりも持たなくなる．なぜなら，完全な無償性は現実から遊離した観念の中にのみ存在し，しかもその観念は存在の証明とは成りえても，生きた現実に働きかける存在そのものとは成りえないからである．さらに，問題は複雑である．というのは，不条理の思想は他の一方で創造に対して次のことを要求するからである．すなわち，「創造はまた人間の唯一の尊厳，すなわち，自己の条件に対する強靭な反抗と不毛とわかっていながら為す不撓不屈の努力の悲痛な証明である．」(ibid. p. 190—p. 191) しかも，これらが「何もののためでもなく」(ibid. p. 191) 為されるのである．ここに至って，カミュは図らずも，彼がたどった不条理の創造に関する必然的な推論の果てに待ち伏せていた，不条理の矛盾という落し穴に陥る．「人間の尊厳」とは，現実における人間を中心に考える者にとって人生の最大の目的でなくて何であろうか．また「自己の条件に対する強靭な反抗と不毛とわかっていながら為す不撓不屈の努力」とは，人生に意味を仮定する明証性のあらわれであるとともに，人生の価値を求めようとする試みのあらわれでもある．これらを「何もののためでもなく」為すことは，見せかけの世界における観念的な人間には可能であっても，生きた現実における血の通った人間には不可能である．「人間の尊厳」とは，人間が存在するということに依存する一つの価値判断である．不条理の創造が自己のうちに，人生の意味を持ちながら「何もののためでもなく」為されるということは明らかな矛盾である．しかし，カミュは『反抗的人間』の序論で，不条理における価値判断の矛盾を次のように承認している．

「不条理は，内容において矛盾している．生きること自体が，一つの価値判断であるのに，不条理は生を維持しようと望みながら，あらゆる価値判断を斥けるからである．呼吸することは判断することである．」(Pléiade 版 p. 417)

不条理の矛盾を克服するために，カミュは『反抗的人間』において，燃え上がる情熱と慎しい知性の抑制に満ちた反抗の美学の輝ける論理を展開する．反抗の創造に関する論理もまた現実との関係を前提としている．不毛の思想は，いかなる現実にも満足しないのと同時に，それを高揚しようとする強い要求を持つ．反抗がその光をこの二つの作用に投射

する時，創造の現実的基盤は次のように簡潔に要約される．「創造とは統一の要求であり，世界の拒絶である．」(ibid. p. 657)

徹底した「世界の拒絶」は，現実に創造の根拠を持ちえないから，形式的で単なる慰めの作品しか生み出さない．同様に，芸術のための芸術は世界と断絶し，その作のうちにまがいものの現実しか含みえず，しかも社会に対して無責任な態度を取る結果となるのでカミュにとっては無縁の芸術である．また，反抗の文学は，どんな社会であっても社会に対して反抗するという呪われた詩人の教義とも異なっている．

それでは，統一に向かう真の反抗の芸術とは，どのようなものであろうか？　カミュは反抗の芸術を次のように定義している．

「あらゆる反抗には，統一の形而上的要求，それを捉えることの不可能，それの代用となる世界の建設が見出される．この見地からいって，反抗とは世界の建設である．このことは同時に芸術の定義ともなる．事実，反抗の要求は，ある点，美的要求である」(ibid. p. 659)

この定義は，芸術の原理が選択を前提としていることを示している．芸術は，移り行く永遠の生成から「反抗の要求」に従って，「世界の建設」のために価値あるものを選択しなければならない．この選択が美的な領域で為されるいうことは，自然的現実から出発し，歴史的現実に到達したカミュの詩人的資質の成熟を意味する．創造の根源にあって，芸術家に必須の要素である美が，現実世界の肯定と否定という均衡の中で創り出されるための条件をカミュは次のように決定する．

「美を創造するためには，現実を拒絶すると同時に，現実のある様相を高揚しなければならない．芸術は現実を否定するが，現実から逃れることはできない．」(ibid. p. 661-2)

それでは，このように現実に対してきわめて忠実な芸術が réalisme という形式をとるであろうか？　réalisme とは，赤裸な現実を修正することも，選択することもなしに，ただ再生することである．完全な réalisme は，現実をあるがままに完全に再生するだけであるが，このようなことは神的なものに頼らない限り人間わざでは不可能である．表現の条件である現実の超越を手に入れるためには，創造の絶対的自由によって現実とのかかりあいを希薄にする必要がある．réalisme という形式をとりえない反抗の芸術家は，現実の全体性を芸術的統一に還元するために，現実とは，つかず，はなれずという立場に立たなければならない．

以上で創造に不可欠な要素の一つである現実の拒絶と高揚についての考察が一通り終ったので，もう一つの不可欠の要素である「統一の要求」について考察していくことにする．カミュの創造の原理の源からほとばしり出る情熱は，統一への情熱である．過去の状況と現在の感覚は，思い出によって統一され，修正されなければならない現実世界に対する郷愁と反抗は理性的な自由によって統一され，行動と内的生活は周到な心理描写によって統

一される．このような統一こそが，現実の持たない形態を現実に与え，しかもそのことによって，それ自身として完結した創造的世界を生み出す．しかし，この世界が芸術的な形式と内容を確保し，統一が奔放に走らないためには，この世界に必要な，ある様式を招来しなければならない．この様式においても，現実の執拗な確認が最も重要な意味を持つ．現実を修正する際に，現実に基づいた反抗がなければその様式は空虚なものであり，また絶えず逃がれ行く現実を引き止める反抗の要求は，形式と内容の緊張においてのみ創造に血を通わせることができる．しかし，現実に服従した芸術家のなまのままの現実は創造的な統一をもたらさないので，作り直された現実に統一ある形態を与えるための様式化が必要になってくる．この様式化は相対的に言って，控目でなければならない．なぜなら，すぐれた芸術は常に内容が形式に先行するものだからである．

それでは，以上のような統一と様式のもとに，芸術家自身の実在，つまりこれが芸術家にとって最も大切な現実なのであるが，これを充足させる芸術はどのように確立されるであろうか？　カミュの反抗とは，自由を獲得するためのニヒリズムに対するひたむきな挑戦に他ならないが，芸術家がそれに貢献するためには，創造的自由を確保することが必須の条件である．そしてその可能性は，反抗の美学の中央に慎ましやかに君臨している美そのものに依存する．美は自由のために奉仕する．なぜなら，芸術家は創造的な生き方によって圧制と隷属から解放されるのであり，美は芸術家の中に先験的に介入していなければならないものだからである．しかし，創造の世界だけで自由を手に入れるだけなら，芸術家は「自由の証人」としての役割を全うすることはできない．自由の傍観者を超越し，自由を確保するための可能性は engagement そのものの中にあり，engagement の文学の中だけにはない．カミュの engagement の文学についての基本的な考え方は次のようなものである．「私は参加の文学 les littératures engagées より，参加する人間 les hommes engagés の方がずっと好きだ．（中略）私が彼ら（注，参加の文学者のこと）に望みたいのは，作品ではあまり参加せず，日々の生活でもう少し参加してくれることだ．」（*Carnets* II p. 180）

カミュは創造によって建設しなければならない理想の世界を次のように設定する．

「それは各人の心の中にある自由と尊厳に対する渇望を常に癒してくれる世界である．」
（『反抗的人間』p. 679）

このような創造的世界は，創造の対象である人間の条件が人間の尊厳を要求する世界である．しかもそれはあくまでも地上における生きた人間の生きた生活より成り立つ世界であり，神のいない世界である．カミュにとって確かな現実とは，神に対抗する現実である．そこでは人間の尺度に合った芸術だけが，確実に生まれる．しかし，そこで何が成就するかは明らかではない．それは人類に課された永遠の問題であり，カミュという歴史上の一才能が解決することは不可能である．けれども，美は反抗を行なわないが，反抗と芸術は，美がなくては成立しないという最も苦悶に満ちた真理をその生涯を賭けて追求した彼の情熱的態度が依存するのは彼の誠実さ以外の何ものでもないということを認めることは容易

である.

参　考　文　献

Albert Camus: Essais (Bibliothèque de la Pléiade, 1965)
Albert Camues: Carnets I (Gallimard, 1962).
Albert Camus: Carnets II (Gallimard, 1964).
Jean-Paul Sartre: Situations, II (Gallimard, 1948).
Roger Quilliot: La Mer et les Prisons (Gallimard, 1956).
Robert de Luppé: Albert Camus—dixième édition (Classique du XXe siècle, 1963).

（後　記）

論文中の引用文は下記の翻訳書を参考に致しました.
「カミュ著作集」4, 5（新潮社）
「太陽の讃歌」（新潮社）
「反抗の理論」（新潮社）